

スタイル 様式という歴史へ

乾邸にみる邸宅建築の様式——保存・活用の手掛かりとして

はじめに

住吉山手の乾邸（1936（昭和11）年）¹は、第二次世界大戦に向けた戦時体制に入る直前に関西財界人をクライアントに建てられた邸宅建築である。大阪や神戸で日本を代表する企業の礎が築かれ、多くの商用建築が建てられた時代に「日本最後の様式建築家」といわれた渡邊節²がこの住宅の建築家として選ばれたのである。

その後およそ60年の月日が流れ、近年乾邸は物納される。その結果、この個人住宅が公開されることとなり、幸か不幸か、その華麗な姿を眼前にする好機を得ることとなった。昨年来、頻りに催されている市民団体⁹の見学会が大きな反響を呼び、今年3月には建築家の団体のシンポジウム¹⁰も開催された。これら、乾邸の保存・活用を考える機運が徐々に高まる一方、経済的な問題を前に「取り壊しが近い」との声が忍び寄る。そこで今回は乾邸を「様式」を切り口に考察し、この建物を失う愚かさを問う。



住吉山手と邸宅文化

乾邸が建つ住吉・御影地区は、背後に六甲山系を抱く成熟した高級住宅地である。その歴史は英国人グループによる日本初のゴルフ場（1901年）や六甲山の別荘開発が端緒となり、久原房之介（関連企業以下同じ：日立製作所）や、武藤山治（カネボウ）、野村徳七（野村證券）、岩井勝次郎（日商岩井）、住友友純（住友グループ）などといった当時の関西の錚々たる財界人が多数、住まいや別荘としてこの地に居を構えていた。またこれらの人々の社交の場として「観音林クラブ」の活動も生まれる。このクラブでは、碁、玉突き、謡曲、生け花等の文化クラブの他、幼稚園、診療所、集会所などの施設も合わせてつくられた大規模なものであった。因みに、この地域にはほかにW.M.ヴォーリス（1880-1964）設計の小寺邸²（1930年）、本格的ハーフティンバーの武田邸（1932年）、



香雪美術館洋館（旧村山龍平邸・1909年）が残るほか、震災後、遠く京都に移築保存された田辺貞吉邸（1908年）などがある。

このように住吉山手³は、日本の代表的な郊外邸宅地として高度の歴史的文脈をもった地域のひとつと言え、それは乾邸などの現存する住宅群と一体となってはじめて歴史の追体験を促してくれるものである。



綿業会館と乾邸

建築主の乾新兵衛は当時近くに住んでいた渡邊とゴルフなどで親交があり、また渡邊が手掛けた芦屋市の寺田甚吉邸（1932年）を気に入ったことから設計を依頼する。住吉山手という邸宅街において乾家に必要とされる邸宅の様式（姿）は自ずと導かれていったと推察できる。

乾邸の設計スタッフのひとりには渡邊事務所にいた村野藤吾の下で綿業会館⁴（1931年）の設計に携わった須藤員雄であり、また綿業会館と同じ「内外木材」が内装に関わったようで、綿業会館とは共通点が多く、メタルワークや木彫、漆喰細工など工芸的な仕事の多くも同じ職人が当たったようである。

様式的には、綿業会館と同じデザインボキャブラリーを住宅向けに優しくアレンジして使っている。様式のトーンを自在にコントロールする渡邊の手腕が見え、市街地での商用建築ではできない豊かなアプローチのロジア（loggia柱廊）空間⁷や変化に富む外観が実現している。



建物の概略

乾邸は六甲山系の中腹に南面し、およそ1,160坪の敷地にゆったりと建つ約220坪の洋館である。震災前には和館も併設されていたが、プランを見るに実生活はこの本邸で行われていたようである。建築主の海運業という仕事柄、外国人も含めたゲストをもてなすことも多く社交・接客も重要な機能とした住宅と思われる。

プラン¹⁴は一階に接客室を兼ねた居間と家族の食堂や和室があり、その他に女中室や料理場、略応接、事務室などのサービス・管理スペースが附される。二階には主寝室、夫人室、衣装室（和室）、女中室、予備室、納戸（中二階）、そして港を見晴らすサンルームが計画されている。メインの階段以外にもサービス用の別階段も備え、機能的な面で十分整理された平面計画がなされている。また、設備に定評のある渡邊の設計とあって乾邸建設当時の最新の設備が施されている。

外観の様式

仰ぎ見るだけでは全景はつかめない規模であるが、南立面図⁹によると、6寸勾配の寄せ棟屋根（釉薬葺瓦葺き）が掛かる総二階建てで、真ん中にデンティル（歯状装飾）¹¹を付けたベイウインドウ、大屋根にはドーマーを付け、シンメトリーに近いが、アプローチ動線からの視線をたどると煙突二本とロジア、平屋部分で変化を付けたピクチャレスクな外観である。屋根の軒の出は特殊なディテールのオープンコーニスで受け、壁の要所は石積み風に見せ、他は左官仕上

※乾邸データ

建築主：乾汽船社長 乾新兵衛（1888-1940）

施工：竹中工務店

住所：神戸市東灘区住吉山手5-1-30

構造・規模：RC造木造（一部木造）地下1階地上2階（一部3階）地に敷2棟、車庫

地域・地区：第1種低層住居専用地域（建築率40%容積率80%）

第1種高度地区 第3種風致地区

1 乾邸北面外観・2ヴォーリス設計小寺邸・3 住吉山手の景観・4 繪業会館庭話室・5 居間の暖炉の彫刻・6 居間の階段のメタルワーク・7 ポーチ・8 クリル越しに見るロジア・9 南面立面スケッチ・10 渡邊節・11 軒のデンティル（虚状装飾）とドーマー・12 食堂のシャンデリアと天井の漂浪細工・13 階段ホールのダイヤ格子のステンドグラス・14 乾邸平面図・15 繪業会館食堂の天井装飾（ミューラルデコレーション）・16 乾邸居間の天井装飾・17 階段ホール手摺りの彫刻
（写真6.7 奥村由和 10. 出典建築家渡邊節 その他稲上文子）

稲上文子（いながみふみこ）

1960年 奈良県橿原市に生まれる

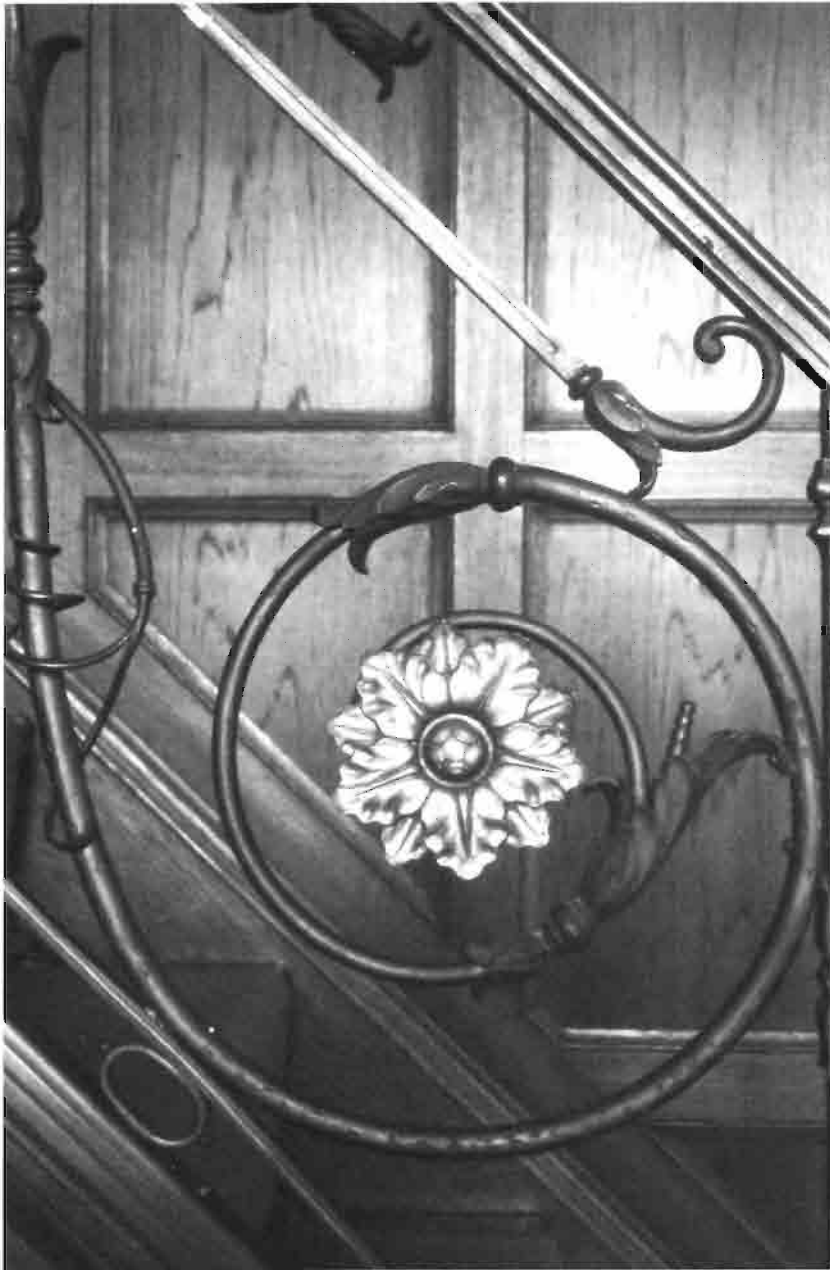
1983年 京都市立芸術大学美術学部環境デザイン卒業
松下電工株式会社入社、西澤文隆「実測」に参加
二村建築研究所入社

1987年 主に数寄屋建築に携わる

2000年 KAZAとwww.kazabito.comを開設

著書 『和風金物の実際』（学芸出版社・1998年）

『町家再生の核と知恵』（学芸出版社・2002年）



6



7



8



9



※1 渡邊節 年譜
※2 渡邊節 年譜

10

- 1967 死去
1964 多根邸
1963 芥木カントー倶楽部
1952 鹿児島銀行大阪支店
1952 大阪府建築士会会長就任
1944 乾邸六甲山荘
1939 東京糖業会館
ビル安祥亭
1938 芝原邸（京都・現キリン）
1937 乾邸
1933 寺田邸（兵庫）
齋藤邸
1931 綿業会館
1930 平井邸
村野藤吾独立
1928 日本勧業銀行京都支店
市川邸
（05年取壊予定）
大阪ビルディング本店
興教会
1925 小原邸（東京・現大森福）
日本興業銀行本店
1923 大阪商船神戸支店
1922 米田建築事務所
1920 欧米建築事務所
木村邸
山田邸
1919 井上邸
大森邸
1918 村野藤吾入所
1916 渡邊建築事務所開設
1908 東京帝国大学工学部卒業
1884 福原邸に生まれる
（福原邸は現在、福原家は米田邸）



14



11

げである。

この外観にあえてアメリカにおける邸宅建築の様式をあてはめると「第二イタリアンネッサンス リバイバル式」（1890-1930）と呼ばれたものと特徴の多くが当てはまる。ただ大面積のステンドグラスの窓を含む豊富な開口部を持つところには日本的な嗜好が出ていて、あえて名付けるとすれば「地中海風折衷様式」というのが妥当ではないだろうか。これは海を見下ろす山腹に建つ乾邸のイメージが素直に重なるスタイルの選択と言える。

アプローチまわり

車寄せには角柱と丸柱がデュアルに配され、リズムカルでかつゴージャスである。柱の様式はトスカナ式³で、オーダーを見せつけるようなイオニア式やコリント式とは明らかに異なり穏やかな印象を受ける。商用建築の場合のように通りに向かってその威厳をアピールする必要はなく、柔らかく魅惑的な空間を創り出して迎賓の気持ちをゆだねている。

ここで特筆すべきことは、オーダーやボルトという西洋の様式を使いながら、玄関へのアプローチの動線には和的に屈曲させる技法を使っている。洋的なシンメトリーをあえて崩し、曲がるたびに違う風景を見せる手法である。実際の距離感より奥行きを感じさせ、訪れた人の気分を昂揚させる。またアイキャッチの挿入も和的な印象があり、車寄せの空間に包まれたとき、どれも正面をはずして目に入る。アーチ型の内玄関や斜め上の小天蓋付きのブラケットなどがそれである⁷。つるんとした緩いボルト天井の網代貼りタイルの工芸的な美しさは言うまでもなく、片側が吹き放しでもう片方は石積みのマッシブな表情とこの変化も何度訪れても感動を覚える構成であり、これは様式を離れて渡邊節の設計アイデンテ

ィティの表出と見るべきであろう。

インテリア

玄関入口には内装での装飾言語と呼応する石彫（葡萄唐草）の三方枠が付き、その中にはメタルワークの両開きグリル⁸が入る。この玄関ではポーチから一転してひやりとしたタイル貼りの空間となる。甘い緑色タイルの壁の正面にニッチがあり、床は大理石（トラバーチン、蛇紋、オニキス）貼り、天井には葡萄の房を思わせる照明が付く。一段上がって荘厳な階段ホール。このホールの手前にはこれも瀟灑なメタルワークの硝子屏が迎える。メタルワークという当時の先進国であるアメリカ渡来のエレメントを古風な様式に加味したことは、当時の日本ではとてもモダンに感じたことであろう。この繊細な扉越しに見せると、色の濃いチークのインテリアはより迫力を増す。ここからは絨毯の上を歩くわけだが思わず仰見する空間で、見るものすべてエキゾチックである。深い彫りのうねる手摺り¹⁷が折れ曲がり階上に向かい、北側のダイヤ格子のステンドグラス¹³からは鈍びた光が降りてくる。ここでは持ち送り（brackets）や壁はジャコビアン様式⁵で、階段手摺りはクイーンアン様式⁴という具合に様式を混在させながら使っている。この空間はチーク貼りのドーリア風双柱で締めくくられ、180度転回して居間の扉を前にさせるブラン



12

である。

この階段ホールに酷似した例はM,M&W⁷設計の住宅（C.H.Mackay Residence 1902年アメリカ）に見られることから、これも渡邊がM,M&Wから影響を受けたスタイルとの推察も可能である。

居間はジャコビアン様式がベースで、正面の暖炉⁵に始まり、直線的な鏡板パネルの壁や柱型に施されたリネンフォールド（布畳み）柄の木彫もまたジャコビアンの特徴である。同じジャコビアン様式の綿業会館の談話室⁴より規模も小さく、住宅向きに適度に薄味に仕立てているのが比べるとよく分かる。またステンドグラスも綿業会館と共通する意匠だが、住宅らしく南面一杯と暖炉脇にと大面積に入れられ開放的印象にしている。このステンドグラスのダイヤ型は大判ガラスのなかった時代の窓への郷愁であるらしいが、この物語性はアメリカ様式建築からの間接的な引用である。また壁際には「渡邊階段」とも言える飾り階段が綿業会館、糖業会館（1939年）など



13

*3 トスカーナ式

古典建築のオーダーの一つで古代ローマ建築に起因する。円柱の直後に対する高さの割合が最も小さくシンプルなもの。乾邸ではさらにその割合は小さく約6.7。すなわちずんぐりしている。

*4 クイーンアン様式 Queen Anne Style

イギリスの女帝アン(1702-1714治世)の趣向によるスタイルで、優美な曲線が使われる。ロココ様式の影響を受けたものであるがフランスよりも合理的質実さを持っている。

*5 ジャコビアン様式 Jacobean Style

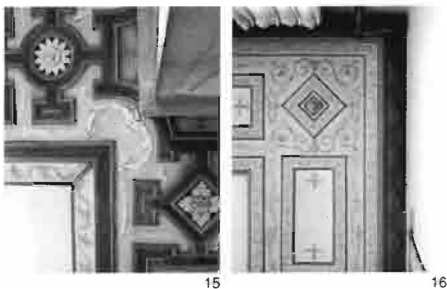
イギリスのJames 1世(1603-1625治世)に因む。エリザベス様式のあとの初期イギリスルネッサンススタイル。直線的で比較的シンプル。スパイラルツイストや豊種の印の葡萄柄、リネンフォールド(Linenfold)、下すばまりのピラスタ-pilaster(付け柱)などに特徴がある。

*6 アダムスタイル Adam Style

18世紀後半。イギリス人建築家ロバート アダム Robert Adam (1728-92)とその弟ジェームズ James (1730-94)らによる軽快優雅な新古典主義建築様式。そのモチーフはウエッジウッドの陶器

の柄を彷彿とさせる。

*7 マッキム・ミード&ホワイト事務所 McKim, Mead and White (1879-1915 アメリカ) (略称: M, M&W)
 仏工エコール・デ・ボザールに学んだマッキムが平面計画。画家志望だったデザイナーホワイトが色彩とデザイン、それらをミードが調整するという三人の共同事務所。様式を駆使したデザインパリエーションは豊富。渡邊節、村野藤吾らに影響を与えたといわれる。主な作品: ロウ邸(1887年)、ブルックリン美術館(1893年) ホストン公園図書館(1887年)、ダウタウンニューヨークビル(1910年)



と同様に付けられている。これはダイナミックな空間を演出するための手法として渡邊が好んで用いた階段である。

この階段のオールヌーボー風のメタルワークの手摺り¹⁵やアダムスタイル^{*6}を思わせる柄の天井装飾¹⁶は重厚で男性的なジャコビアンスタイルに女性的な優美さを加えている。このような様式を取り合わせる手法は、やはりM, M&W作品などを範として渡邊がアレンジしたと考えられる。

渡邊節と様式建築

モダニズムが台頭しつつある時代にあえて様式に拘泥し、自らの様式解釈のもと多様な様式を組み合わせる「渡邊様式」は、渡邊曰く「只いいたい事はエジプト時代から近いルネサンス時代に至る数多い建築の代表的なものが、今日に至っても尚飽かれずに賞賛されるのを見て、あまりに奇をてらう新建築が果たして遠い将来の後世迄も建築歴史を飾り得るかに疑問を持つものである」(『歴史を飾る建築』『日刊建築通信』昭和38年1月2日号)のように先人の智慧と美意識をいかに眼前の建築に昇華させるかに捧げた渡邊の建築哲学によるものであった



のだろう。

保存・活用への経緯と現況

旧乾邸は平成6年に相続税として国に物納された土地に建つ家である。本来なら土地の物納は更地であることが条件であるが、乾邸の場合、物納当時から渡邊節設計による貴重な住宅の遺構として建築的価値が認識されていたため、特例的に神戸市の買い上げを前提に国がその管理を神戸市に無償委託された経緯を持つ。

しかし神戸市における保存・活用法の提案が具体的に動き出したところ、平成7年1月17日阪神淡路大震災に見舞われる。和館は半壊し解体されるが、幸いにも洋館は小規模の補修で済む。が、後に震災復興など多大な出費にあえぐ神戸市は買い上げ構想の頓挫を余儀なくされ、保存・活用についても妙案がないまま長く暗礁に乗り上げた状態が続いていた。

現在、毎年維持費を支出して管理している神戸市は吹田市の「西尾邸」^{*8}を好例に「特段の協力」を求めるなど、国との協議を進めていると言われている。

ただ、このままだと近くこの土地は国税局により競売に掛けられ、結果的に建物は取り壊されマンションなどが建つ可能性も大きい。これを危惧する市民団体^{*9}は頻繁に見学会や講演会、ミニコンサートなどを行い、多くの人々の目を乾邸に向ける努力をしている。また神戸市に対して乾邸活用の方法を提案して具体的な運営・管理にプラスして、自ら踏み込んでリスクを背負う覚悟までも

*8 「西尾邸」保存・活用への道程

西尾邸は約1,400坪の敷地に建つ江戸時代の仙洞御料の庄屋。保存・活用の支障に取り組んできた「旧庄屋敷保存活用会」などの運動の成果もあり、平成15年9月1日保存が決定。吹田市が国から「西尾邸」を借り受け、同市が管理・保存活用することとなり、平成17年春に「西尾邸住宅」として公開の予定。

*9 アメニティ2000協会

トラスト基金による自然そして歴史的環境の保護活動をめざしている協会。2004年1月に神戸市に対して旧乾邸の保存について提案書を提出。乾邸での見学会やコンサートなどを継続的に開催している。提案書要約: 地域特性を活かし、市民公開型の公益施設として神戸市が文化センターとして会館運営を行い、当協会が美術館および歴史的建築物の資料センターの業務を運営する。

*10 シンポジウム

テーマ: 「住吉山手の洋館 旧乾邸の活用を考える」

日時: 2004年3月13日(土)

主催: 坂本勝比呂(神戸芸術工科大学名誉教授)

講演内容: 建物の評価、地域の歴史的文脈、なぜ残すか、活用について
 パネラー: 坂本勝比呂、岩井珠恵(ビジュアルデザイナー)、清水彬久(アメニティ2000協合理事長)、高橋佳子(東灘区長)、野崎瑞美(兵庫県建築士会神戸支部長)

コーディネーター: 森崎洋行(JIA兵庫会・建築家)

主催: 日本建築家協会兵庫会、兵庫県建築士会神戸支部

見せている。

一方建築に携わる専門家には、渡邊節の業績をより専門的な目で評価・検証し、行政サイドのみならず広範囲な人々を説得する責務が課されている。3月のシンポジウム^{*10}では、復原への予算立てや活用時に発生する改装・維持費用のシミュレーションを行うこと、行政サイドの智慧を引き出して法的な問題(用途規制など)をクリアしていくこと、税金や財政面の専門家を巻き込む必要性などが活発に討議された。

因みに、兵庫県立美術館(2002年)は約300億円(土地、建物)、大阪市中央公会堂保存工事(2002年)は総工費約115億円といわれている。これらが文化度に応分な予算であるならば、乾邸を建築文化としてだけでなく戦前の邸宅文化実体験の場として保存・活用する可能性は十分あると考える。今、公・私費を問わずとも、採算性への議論は続けるべきであるが、まず、

1. 取り壊さない

2. 竣工時の姿に修理・復原する

までは最低限なすべきことであろう。

現在乾邸は、漏水により車寄せの列柱の石が剥落し、天井装飾に傷みが見られる。建て付けの悪い建具のせいで一部室内が風雨にさらされる心配もある。また庭木はすっかり荒れているなど、日々その容姿を落とし、修復への費用が加算されていく惨状である。

乾邸や住吉山手の地域性は、常に歴史を踏まえながら前進していく我々にとって貴重な財産といえる。スクラップ&ビルドの時代の未だ途上の現在、多様な時間軸を内包してこそ新たな時代の一步の構築が可能ではないだろうか。決して目の前の「宝物」に経済という篩を掛けるだけで簡単に葬り去ってはいけない。

本誌編集委員 稻上文子

参考文献など

旧庄屋敷保存活用会H.P. 2004年3月

アメニティ2000 協会H.P. 2004年3月

日本共産党 神戸市会議員団H.P. 2004年3月

『日本の建築 明治大正昭和6都市の精華』山口眞著 三省堂 1979年

『歴史遺産 日本の洋館』第3巻 藤森照信著 講談社 2002年

『アメリカン・ハウス・スタイル』ジョン・ミルズ・ペカー著

井上書院 1997年

『インテリアの家具と歴史』西澤廉 山本拓弘著 相模書房 1993年

『ビジュアル版西洋建築史』長風重武 監和在著 丸善株式会社 2003年

"A Monograph of The Works of McKim, Mead & White 1879-1915 vol." Published by PROMETHEUS PUBLISHING CO. Paul Wanel & Maurice Krakow "Encyclopedia Britannica" by Encyclopedia Britannica Inc. 1966.

上記以外に編集委員の解説、坂本教授の講演*10を参考に致しました。